

ヘジェン語の格接辞と再帰所有接辞

— 公刊された民話テキストの分析 —

田村建一

Kenichi TAMURA

日本語教育講座

0 はじめに

ヘジェン語 (中国語では赫哲 [hezhe] 語) は, スンガリ川 (松花江) 沿岸, アムール川右岸, ウスーリー川左岸といった, 中国領内のロシアとの国境沿いの地域で話されているツングース系の言語である。ヘジェン語は従来, この言語といわゆるナーナイ語クル・ウルミ方言とを一緒にして一つの独立した言語(キリ語)と見なした Doerfer (1975)¹ をのぞき, ナーナイ語の一方言として分類されていたが, 風間 (1996) による詳細な音韻対応の検討の結果, ナーナイ語とははっきり異なり, むしろウデヘ語やオロチ語に近いことが解明された。

ヘジェン語の資料としては, ロシア及び中国の研究者たちによってなされた文法と語彙の記述のほか², 1985年に創刊された『満語研究』(年二回刊行)に連載されている民話テキストが存在する。各研究者の文法記述には, 名詞の格組織や動詞の時制組織をはじめさまざまな点において若干の相違が見られるが, これが地域方言差を表すものなのか, あるいは世代差等のインフォーマントの個人差に由来するものなのかは明らかではない。

本稿の目的は, 公刊された民話テキストに基づいてヘジェン語のいくつかの格接辞の機能を明らかにし, また再帰所有接辞の存在を立証することである。さらに, これらの点から見た他のツングース諸語との関係についても論じてみたい。

本論の前にまず第1章で, 主として音韻的特徴に基づいてツングース諸語内でのヘジェン語の系統的な位置づけを論じた風間 (1996) の研究を紹介し, 第2章以下で形態に関する個々の項目を扱う。

1 ツングース諸語の分類とヘジェン語

ツングース諸語は, 祖語における *u, *p-, *x- などに関する音韻対応と人称・再帰所有接辞の有無を基準として Ikegami (1974) および池上 (1989) によって次のように分類されている。

第I群 エウエン語, エウエンキー語, ソロン語, ネギダル語

第II群 ウデヘ語, オロチ語

第III群 ナーナイ語, オルチャ語, ウイルタ語

第IV群 満洲語, 女真語

ヘジェン語がこの四つの群のうちどれに最も近いかという問題の検討において, 風間 (1996) はまず上述の Ikegami (1974) が用いたのとまさに同じ基準を用いてヘジェン語がナーナイ語を含む第III群よりも第I・II群に近いことを論証する。それを示す例の一部を挙げれば次のようである。第I群からはエウエンキー語, 第II群からはオロチ語, 第III群からはナーナイ語が代表として例示される (各言語名の略号は本文の後の略号欄を参照)。相違が明らかな第IV群は考察の対象からは外されている。

Hz	Ek	Oc	Na	意味	祖語
xakin	xakin	xakin	paa	肝臓	*p-
adi	adii	adi	xado	どれほど	*x-
tigde	tigde	tigde	tugde	雨	*u

次に, ヘジェン語が第I・II群の中では第I群よりも第II群の方に近いことが以下の「骨」「皮」「座る」のような例によって示される。ただし, 逆に第I群の方と同じふるまいを示す例 (以下の「這う」「重い」) も存在する。

Hz	Ek	Oc	Na	意味	祖語
giamsa	giramna	giamsa	girmaksa	骨	*ms
nasa	nanna	nasa	nanta	皮	*ns
te-	tege-	tee-	tee-	座る	*-g-
mirki-	mirki-	mikki-	mujku-	這う	*rk
urge	urge	ugge	xujge	重い	*rg

風間 (1996) は, asan「女性」や sagdi「大きい」などヘジェン語と第II群の言語の間でのみ語形や意味が共通するいくつかの語の存在も考慮に入れた上で, 結論として, ヘジェン語は第II群に属すが, その中でかなり早い時期にオロチ語やウデヘ語から分岐したものと考えている。また, *ls や *rŋ のようにヘジェン語だけが祖語の音韻を保持している例 (xulsa「掛け布団」や xerjen「膝」) などに基づき, ヘジェン語が独

自の群として分類される可能性も示唆している。

また、ロシアの研究者たちによってナーナイ語の中に分類されてきたクル・ウルミ方言（以下では単にクル・ウルミ方言）については、音韻対応において基本的に第I群と同じ特徴を示すものの第III群の特徴もいくらか見られることから、風間（1996）は、ナーナイ語の方言ではなく、第I群の言語が第III群の言語の強い影響を受けて成立したものと考えている。このクル・ウルミ方言のツングース諸語内での位置づけに関する見解は、Doerfer（1975）の考えと一部重なる点もあるが、Doerfer（1975）と異なり、風間（1996）ではヘジェン語がクル・ウルミ方言とは別個の言語として独自に系統的な位置づけがなされている³。

このようにヘジェン語とクル・ウルミ方言は、音韻対応に基づいてツングース諸語内で別の群に分類されるわけであるが、この隣接しあう両言語は接触によって相互に影響を与えあっていることが語彙の面から示される。すなわち、この二つの言語にさらに同じく隣接するナーナイ語ビキン方言を加えた三つの言語が、周辺の他のツングース諸語には見られない多くの語を共有していることが風間（1996）によって指摘されている⁴。それらの語の多くは以下の例のような満洲語からの借用語であるが、これはかつて満洲族の文化的影響がこの地域にまで及んでいたことを示すものであろう。

Hz	K-U	Bk	Ma	意味
imaxa	emaxa	imaxa	nimaha	魚
sojan	sojan	sojan	suwajan	黄色
malxun	maaxon	malxon	maluqan	多い

それぞれが別の群に所属する上記三言語が語彙の上で多くの共通性を示すことから、風間（1996：134）はこれらの言語の間の関係を「アムール中流域言語圏⁵」と呼んでいる。本稿では、形態面においてもこの言語圏に特有な現象が見られるのかという点にも注目する。

形態的な面における満洲語のヘジェン語に対する影響についてはすでに津曲（1993）が論じているが、そこで指摘されたヘジェン語の特徴のいくつかは本稿でも取り上げる。

2 所有表現と再帰所有接辞

2.1. 表記について

本稿でおもな考察の対象となる尤志賢採録の二つのヘジェン語テキスト（中国語による逐語訳と全文訳付き）のうち「アントウ・ムルグン（安徒莫日根）」では中国語の拼音表記に則したローマ字表記が、「シャンスウ・ムルグン（香叟莫日根）」では発音記号が用いられている。発音記号表記においては、中国の研究者た

ちの多くが中国領内のツングース諸語の表記にさいしてそうであるように、閉鎖音と破擦音は有声と無声ではなく、有気と無気の対立として表記されている。従って、例えばローマ字表記の d, t は発音記号では t, ʈ と表記される。本稿ではテキストのヘジェン語をはじめツングース諸語の表記にさいしては、基本的に津曲（1993）や風間（1996）が用いているローマ字による表記法を採用するが、ə に関しては e を用いる。

なお、ヘジェン語の短母音の組織に関する解釈は研究者によってかなり異なり、立てられる音素の数は、Sunik（1958）と Zhang et al.（1989）が 6、安（1986）が 7、朝克（1997）が 8 であるが、テキストでは 5 個の母音 a, e, i, o, u しか区別されていない。

次節以降で引用される例文の逐語訳における接辞等の分析は、格接辞と所有接辞を中心に行われ、動詞句の細かな分析は原則として省略される。

二つのヘジェン語テキストの間で形態的特徴に関する相違は見られなかったため、以下の説明において特に区別は行わない。

2.2. 所有表現

津曲（1993：82-3）が指摘しているように、ヘジェン語に対する満洲語の影響を示す特徴としてまず、ヘジェン語が属格を有し、さらにその属格接辞（-ji/-i）が道具格としても用いられることが挙げられる。ただし、人称代名詞のみならず名詞にも属格形を認めているのは安（1986：28-29）および朝克（1997：213-5）のみであり、しかも安（ib.）では後述の例文（4）のような属格形を用いない所有表現も認められていることに留意されたい。また、属格形の道具格としての用法に言及しているのは安（ib.）のみである。

安（ib.）と朝克（ib.）によれば、ヘジェン語の所有表現「AのB」においては、以下の例(1)のように属格形の名詞や代名詞の後の被修飾語が人称所有接辞をとる場合と並んで、(2)のようにそれをとらない場合があるが、これらのうち後者の現象は第IV群をのぞくツングース諸語の中では中国領内の諸語、すなわちヘジェン語、オロチョン語、ソロン語にのみ見られる現象であり、同様な表現形式（いわば従属部標示型）をとる満洲語あるいはモンゴル語とこれらの言語との深い関係を示す特徴の一つであるといえる⁶。

(1) ei morin-i ilgi-ni 「この馬の尻尾」
この 馬-属 尻尾-3Sg⁷ (安 1986：29)

(2) sungari mampu-i imaxa 「スンガリ川の魚」
スンガリ 川-属 魚 (ib.：68)

しかし、テキストの中では名詞の属格形は一例も見られず、また接辞 -ji/-i によって道具格を表す例も

まったく観察されなかった。一見して属格接辞とも思われる次の例文(3)に見られるような接辞 -i は、文脈上すべて再帰所有接辞と考えられものばかりであった。この再帰所有接辞については次節で扱う。以下テキストからの引用にさいしては、『満語研究』(MJ)と略すの号数と頁数を標示する。また、必要に応じ引用箇所前後関係を [] で示す。

- (3) antu ĵo-i erge-tiki-ni gemursĵimi
 アントゥ 家-再 方向-方-3Sg 祈りつつ
 「[船の上から] アントゥは自分の家の方向に祈り
 つつ……」 (MJ 1-100)

名詞+名詞の所有表現「AのB」に関してテキストで用いられているのは、次の例(4)のような第 I・II・III群のツングース諸語に典型的な所有接辞による表現方法(主要部標示型)である。

- (4) joxun gurun-ni 「村の人々」
 村 人々-3Sg (MJ 6-67)

安(1986)と朝克(1997)が記述している名詞の属格形が存在が何を意味するのかは非常に興味深い問題であるが、今のところ不明である。安(1986: 1)によれば、清の時代にヘジェン族は満洲語を文章語として用いており、ごく少数ではあるが『満文十二字頭』の一部を暗唱している老人もいた(当時)とのことであるが、こうした伝統の中で満洲語に精通していた一部の層が名詞の属格形を創造し、使用し始めたということがあるいはあったかもしれない。

所有表現において人称代名詞、名詞ともに属格形が一般に用いられ、しかも前述のように被修飾語の所有接辞が任意化されているオロチョン語やソロン語と比べると、テキストのヘジェン語にはアムール川以北のツングース諸語の特徴がまだ色濃く残っているといえるであろう。

なお、人称代名詞の属格形はテキストの中で普通に用いられており、この点では近隣のクル・ウルミ方言やナーナイ語ビキン方言との相違が見られる。ただし、ヘジェン語においても被修飾語の所有接辞が省略される例はほとんど見られない。

2.3. 再帰所有接辞

Sunik (1958: 19)によれば、ヘジェン語では再帰所有接辞が用いられることはほとんどない。朝克(1997: 239-41)の説明でもヘジェン語には再帰所有接辞が存在せず、安(1986)および Zhang et al. (1989)には再帰所有接辞についての言及が一切ない。

このようにこれまでの文法記述は、ヘジェン語における再帰所有接辞の使用に関し否定的である点でほぼ

一致している。しかし、じっさいのテキストを分析すると、再帰所有接辞(-i/-ji, すなわち人称所有接辞の一人称単数形と同形)はかなりの頻度で使用されていることがわかる。以下にその用例を三つ挙げるが、(5)では二人称単数、(6)では三人称単数、(7)では三人称複数が主語であり、いずれも再帰所有接辞が目的語に付加されている。これらを人称所有接辞の一人称単数形「私の～を」と解釈することは文脈上不可能である。また、もし人称所有接辞のついた目的語、すなわち定目的語であるなら、対格形をとらないのはかなり不自然であるが、再帰所有形であれば、他のツングース諸語と同様、格接辞をとらずに目的語として機能することができる。

- (5) šĵi xotu-i niu
 お前 頭-再 出せ
 「お前、(自分の)頭を出せ」 (MJ 1-109)
- (6) Antu ĵu begedele-i ĉabukerere
 アントゥ 両 足-再 開き
 「アントゥは(自分の)両足を開き [力を込めて
 立った]」 (MJ 1-108)
- (7) geren gurun ... šĵiaxu meife-i modiršire
 すべての人々 みな 首-再 撫でて
 「人々は…… [話を聞いて] みな(自分の)首を
 撫で [頭を掻き、誰も行くとは言わない]」
 (MJ 1-102)

このような再帰所有接辞の使用がなぜこれまでの文法記述に反映されてこなかったのかという疑問が生じるが、一つの可能性として、民話のような古い形が残りやすいスタイルにおいてのみ再帰所有接辞が保持されているため、日常語の調査のさいにはそれが現れにくいということも想定しうるであろう。

なお、近隣のクル・ウルミ方言、ナーナイ語ビキン方言、また同じ中国領内のオロチョン語やソロン語などツングース諸語の再帰所有接辞は一般に単数と複数の区別をもつが、ヘジェン語にはそうした区別は見られない(例文(7)を参照)。

3 格接辞

3.1. 格組織

ヘジェン語テキストにおいて名詞の属格形が現れないことは上の2.2.で述べた。それを除いた名詞格変化の接辞を他のツングース諸語と比較すると表1のようになる。比較される言語は、隣接するクル・ウルミ方言とナーナイ語ビキン方言、さらに第 I・II・III群をそれぞれ代表するエウェンキー語、オロチ語、ナーナイ文語である。スペースの関係で表の接辞は、母音調和による交替形などを省略した代表的な形のみである。また、ここに挙げたヘジェン語以外の各言語には、

このほか常に人称所有接辞とともに用いられ、「(人称)のための～を／として」といった意味を表す指定格が存在するのだが、それは除外した。

なお、それぞれの格の名称は多くの言語で果たしているおもな機能に基づいて付けられたものにすぎず、どの接辞もいくつかの機能を兼ねており、時に一つの機能を複数の格接辞が担う場合もあることに留意しなければならない。

表1 ヘジェン語と近隣ツングース諸語の格接辞

	Hz	K-U	Bk
主格	-∅	-∅	-∅
対格	-we/-me	-wa	-wa/-ba
与格	-de/-du	-du	-du
奪格			
道具格	-ji	-ji	-ji
場所格	-le/-dule	-la/-dula	-la/-dula
方向格	-tki	-tki	-či
離格			
沿格		-li/-duli	

	Oc	Ek	Na
主格	-∅	-∅	-∅
対格	-wa/-ma/-ba	-wa	-wa/-ba
与格	-du	-duu	-du
奪格	-dui	-duk	(-doi) ⁸
道具格	-ji	-t/-ji	-ji
場所格	-la/-dula	-laa/-dulaa	-la/-dula
方向格	-ti	-tki/-tiki	-či
離格	-jiji	-giit	-jiaji
沿格	-li/-duli	-lii/-dulii	

表からもわかるように、それぞれの言語が有する格接辞の数に相違はあるものの、どの格においてもそれぞれの接辞は同じ祖形に由来すると見られている⁹。問題は個々の接辞が担う機能のちがいであるが、本稿では方向格と離格の接辞について詳しく見ていく。

3.2. 方向格と離格

表からヘジェン語、クル・ウルミ方言、ナーナイ語ビキン方言には奪格と離格のための専用の格接辞がないことがわかる。では、「～から(来る)」などのように起点を表す場合にはどのような手段が用いられるのであろうか。

日本語の格助詞の用法のように起点と方向を明確に区別する観点からは極めて特異な現象に見えるが、ヘジェン語では方向格接辞 -tki/-tiki が、次の例文(8)のように方向を表すだけでなく(上に挙げた例文(3)も参照)、例文(9)(10)のように空間および時間における起点を

も表す。すなわち、この格接辞が方向を表すのか起点を表すのかは、それを支配する動詞の意味あるいは文脈により決定される。

(8) šaŋseu¹⁰ iligire akin-tiki-ji xesuren
 シャンスウ 立って 兄-方-再 言う
 「シャンスウは立って、(自分の)兄に向かって言う」 (MJ 5-91)

(9) antu jō-tiki delxeidui
 アントウ 家-方 出て行くとき
 「[[父母を探しに]アントウが家から出て行くとき」 (MJ 1-99)

(10) akin-ni enexen-tiki-ni
 兄-3Sg 去る-方-3Sg
 「彼の兄が去って以来[彼の世話をする人はいなくなった]」 (MJ 5-74)

クル・ウルミ方言の方向格接辞も -tki (子音の後では -(t)ki) であり、ヘジェン語と同じ語形をもつが、ヘジェン語とは異なり、この接辞は起点を表すことはできない。この方言では起点は、以下の例のように場所副詞 edjgeji 「ここから」から転用されたと思われる後置詞 edjgeji-「～から」(人称所有接辞が付く)によって表すほか¹¹、場所格や沿格によって表されることもある。この中で場所格は方向や帰着点をも表すので、この接辞はヘジェン語の方向格と同様、文脈によってまったく正反対の意味を表すことになる。

(11) joo-i edjgeji-ni (=joo-la-i)
 家-再 ～から-3Sg 家-場-再
 emexe-ni
 来た-3Sg
 「(彼は)自分の家から来た」 Sunik (1958: 75)

(12) tii joo-li niuxe-ni
 その 家-沿 出た-3Sg
 「(彼は)その家から出た」 Sunik (ib.)

なお、Sunik(1958: 21)はヘジェン語の erge-ji-(<erge 「方向」+ -ji) も後置詞と見なし、「私は町から来た」というこの語を用いた例文を挙げているが、『満語研究』掲載のテキストにおいては、julexi erge-ji 「南の方向から」(MJ 7-76) や ferxi erge-ji 「北の方向から」(MJ 2-95) のように、起点そのものを表すというよりも「方向/側」という名詞の意味がまだ色濃く残されているように思える。

ナーナイ語ビキン方言は、方向格接辞 -či をもつ点ではナーナイ文語と同じであるが、離格接辞をもたない点で文語とは異なる。この方言では、起点は次の例文のように道具格接辞 -ji によって表される。

- (13) em nai ĵog-ĵi baa-ĉi njeexe-ni
一人 男 家-具 通り-方 出た-3Sg
「一人の男が家から通りへ出た」

Sem (1976 : 42)

後述のように他のいくつかのツングース諸語でも、場所副詞など一部の語において起点を表す接辞 -ĵi が見られるが、これが一般の語に対しても生産的に用いられる点がピキン方言の顕著な特徴である。

ナーナイ文語の基盤をなすナイヒン方言では、起点を表すには基本的に離格接辞 -ĵiaĵi が用いられるが、風間 (1993) 等のこの方言による民話テキストの中ではこのほかに -ĵi および -ĵia という接辞が起点を表す例も若干見出される¹²。拙論 (Tamura 1996 : 141-2) で指摘したように、これらの接辞は -ĵiaĵi に由来する可能性もあるが、少なくとも -ĵi に関しては、ピキン方言の -ĵi と同様にツングース諸語の道具格が本来もっていた離格的機能を受け継いでいるものである可能性が強いと筆者は考える。ただし、接辞 -ĵi によって起点を表す用例は、後述する空間的位置関係を示す語以外には少なく、この接辞が -ĵiaĵi に代わって生産的に用いられうるのかどうかは断定できない。

ちなみに Avrorin (1959 : 180) によれば、ナーナイ語では「～から何キロメートル」のように距離を明示する場合には離格に代わって道具格が起点を表す。

なお、ナイヒン方言の -ĵiaĵi をはじめツングース諸語の離格接辞(エウエンキー語 -giit, ソロン語 -giĵi, エウエン語 -giič etc., オロチ語およびオルチャ語 -ĵĵi など) 自体が、語源的には「～の側」という意味を付与する語幹形成接辞 * -gii と離格的機能をもつ道具格接辞 * -ĵi とで構成されたものと見られている (Sunik 1982 : 217-8)¹³。

3.3. 起点を表す -ĵi

離格的機能をもつ道具格接辞 -ĵi は、以下で説明するように特定の意味領域に属す語に関しては、ヘジェン語をはじめいくつかのツングース諸語において見られる。

まずヘジェン語を例に説明すると、ここでは前述のように方向格接辞 -tki が方向と起点の両方を表すことができるが、「上, 下, 前, 後ろ, 外, 中, どこ」など空間的位置関係を意味する語に限り、方向格と離格に相当する形にはそれぞれ接辞 -šiki (時に -ški) および -ĵi が用いられる。以下にテキストからの例を挙げる。逐語訳において -ĵi は道具格接辞としたまま分析する。

- (14) wuji-šiki 「上へ」(例多数)
(15) wujeu-ĵi 「上から」(例多数)
(16) xergi-šiki 「下へ」(例多数)

- (17) antu niĵti-ni xergieu-ĵi-ni
アントゥ 踵-3Sg 下-具-3Sg
「アントゥの踵の下から」 (MJ 4-112)

- (18) ĵule-šiki 「前へ」(例多数)

- (19) ĵuleu-ĵi-ni 「(その) 前方から」 (MJ 7-69)

- (20) ami-šiki 「後ろへ」(例多数)

- (21) kori amieu-ĵi-ni
鷹 後ろ-具-3Sg
「鷹の後ろから」 (MJ 4-112)

- (22) tule-šiki 「外へ」(例多数)

- (23) wurke tuleu-ĵi-ni
門 外-具-3Sg
「門の外から」 (MJ 9-103)

- (24) ĵo do-šiki-n
家 中-方-3Sg
「家の中へ」(類似例多数)

- (25) joxun dou-ĵi-ni
村 中-具-3Sg
「村の中から」(類似例多数)

- (26) jau-ĵi emexe-ši jau-šiki enei-ši-e
どこ-具 来た-2Sg どこ-方 行く-2Sg-疑
「あなたはどこから来て、どこへ行くのか」
(MJ 13-128)

接辞 -šiki は満洲語 amasi 「後ろへ」やナーナイ文語 xamasi 「同」などの末尾に見られる -si と同源で、方向格接辞のツングース祖形 * -takii の交替形である * -sikii に由来する。この接辞はツングース諸語においてもはや生産的ではなく、上記のような空間的位置関係を表す特定の語にしか付けられない。

上に挙げた例から、ヘジェン語において方向格接辞に -šiki が付けられる語には、起点を表す接辞としてはつねに -ĵi が用いられることがわかる。ただし例外として、eu-šiki 「ここへ」と tau-šiki 「そこへ」の対義語は -ĵi をとらず、一般の語と同様、方向格接辞 -tiki を用いて e-tiki 「ここから/この時以来」、ta-tiki 「そこから/その時以来」という形になる。

また、erge 「方向」という語は、方向を表す場合には -tiki しかとらないが、起点を表す接辞としては -ĵi と -tiki の双方が可能であり、例えばすでに引用した ĵulexi erge-ĵi 「南の方向から」(MJ 7-76) と並び ĵulexi erge-tiki 「同」(MJ 8-126) という用例も見られる。

このほかテキストの中で起点を表す接辞として -ĵi が用いられる語には suliau-ĵi 「西から」と ejeu-ĵi 「東から」が見出されるが、これらの語に方向を表す接辞が付く場合の用例は確認できない。

ヘジェン語以外のツングース諸語においても、場所副詞など空間的な位置関係を表す語が方向や起点を表すさいには一般の語とは異なる接辞が用いられる。精査したものではないが、以下そのような例をいくつ

か挙げる。一般の語と同様の格接辞が付いた語形は括弧に入れる。

クル・ウルミ方言 (Sunik 1958)

- au-ski 「どこへ」
 au-ji 「どこから、いつから」
 eu-ski 「ここへ」
 eje-ji 「ここから」
 tau-ski 「そこへ」(taa-tki 「そこから」)¹⁴
 ujuj-ji 「上から」

ナーナイ語ビキン方言 (Sem 1976)

- tao-si 「そこへ」
 taja-ji 「そこから」
 ui-si 「上へ」
 uje-ji 「上から」
 xama-si 「後ろへ」
 xamja-ji/xami-ji 「後ろから」

ナーナイ文語 (Onenko 1986)

- eu-si 「ここへ」
 ejee-ji 「ここから」
 tao-si 「そこへ」
 tajaa-ji 「そこから」
 uj-si 「上へ」
 ujee-ji 「上から」

オロチ語 (Avrorin/Lebedeva 1978)

- awaa-si 「どこへ」
 awaa-ji/(awaa-ji)ji 「どこから」
 tawa-si 「そこへ」
 tawa-ji/(tawa-ji)ji 「そこから」
 ewe-si 「ここへ」
 ewee-ji/(ewe-ji)ji 「ここから」

オルチャ語 (Sunik 1985)

- aan-ji 「右側/右から」(aan-ti 「右へ」)
 ewe-s(i) 「ここへ」
 ewenci/ewenci-ji 「ここから」
 jeun-ji 「左側/左から」
 uj-si 「上へ」
 uuwu-ji 「上の側/上から」
 xai-ji/(xai-ji)ji 「どこから」

オロチ語においては多くの場合 -ji と並んで本来の離格接辞である -ji)ji も用いられることから、-ji が -ji)ji に由来する可能性もある。また、オルチャ語においては、-ji の付いた語が起点を表す副詞となるばかりでなく、「～側」という意味の名詞としても用いられるので、この -ji が前節で触れた語幹形成接辞の *-gii

に由来する可能性もある。

しかし、拙論 (Tamura 1996: 145-6) で指摘したように、ヘジェン語も含めここに挙げた言語はすべて、次のような形動詞の道具格形によって空間的および時間的な起点を表す用法をもっていることから、上の例における接辞 -ji は、ツングース諸語全般に道具格接辞がかつて担っていた離格的機能を継承したものではないかと筆者は考える。

- (27) mii bałjixan-ji-i emučukeen bałjim(i)
 私 生まれた-具-再 一人で 暮らしつつ
 「私は生まれて以来一人で暮らし・・・」

風間 (1993: 93)

- (28) enexen-ji eme bia dulunexen
 行った-具 一 月 過ぎた
 「[その青年が] 行ってからひと月が過ぎた」
 (MJ 1-102)

場所副詞や形動詞においてこうした離格的機能を果たす道具格接辞 -ji をもつ点で、ヘジェン語はアムール川下流地域をも含む近隣のツングース諸語と共通の特徴をもつ。一方、場所副詞における方向を表す接辞の語形が -siki のように -ki を残した形をとる点では、周辺ではクル・ウルミ方言とのみ共通する。

4 まとめ

本稿ではごく限られた文法事項しか扱わなかったが、それでもヘジェン語が周辺のツングース諸語とかなり複雑な影響関係にあることがわかる。

第2章で述べたように、ヘジェン語テキストでは名詞の属格形が用いられず、また逆に再帰所有接辞がかなり高い頻度で用いられることが確認された。これらの事実は、ヘジェン語がこれまで記述されてきた以上に第I・II・III群のツングース諸語の形態的特徴を保持していることを物語る。

格接辞から見ると、ヘジェン語は方向格接辞に -tki という語形を、さらには場所副詞に限り方向を表す接辞に -siki という語形をもつ点で、クル・ウルミ方言とともにエウエンキ語などが属する第I群的な特徴を備えている。

また、格組織において奪格あるいは離格専用の接辞をもたない点で、ヘジェン語はクル・ウルミ方言およびナーナイ語ビキン方言とのみ共通する特徴を備えている。ただし、起点の表し方に関してはこの三言語はそれぞれ異なった手段を用いる。

最後に、空間的位置関係を表す語に限り見られる起点を表す道具格接辞 -ji の存在は、アムール川中・下流域沿岸を中心とする広い地域に共通する特徴である。

略号

言語

Bk ナーナイ語ビキン方言	Ek エウエンキー語
H _z ヘジェン語	K-U クル・ウルミ方言
Ma 満洲語	Na ナーナイ語 (文語)
Oc オロチ語	

接辞その他

3Sg etc. 三人称単数 etc. (人称所有接辞)

再 再帰所有接辞	沿 沿格
属 属格	方 方向格
具 道具格	場 場所格
離 離格	疑 疑問小詞
MJ 『満語研究』	

注

- 1 キリ語の独自性と系統的な位置づけを論じたデルファー氏の一連の論文のうち、本稿では Doerfer (1975) のみを参照する。
- 2 いわゆるナーナイ語クル・ウルミ方言の記述である Sunik (1958) の中にも「国境外のナーナイ人の諸方言について」(16-25頁)として本稿でいうヘジェン語の記述がある。
- 3 これに対し、Doerfer (1975: 62) はキリ語 (クル・ウルミ方言を含む) をエウエンキー語よりもナーナイ語やオロチ語に近いものと考えている。
- 4 ツングース諸語・諸方言の地理的分布については Doerfer/Weiers (1978) の付録の地図 (Die tungusischen Völker und ihre Dialekte) を参照。
- 5 Sunik (1958) ではクル・ウルミ方言の特徴がナーナイ語文語の基盤をなすナイヒン方言をはじめとする「アムール中流域のナーナイ語諸方言」と対比される形で記述されているが、この場合の「アムール中流域」は風間の同表現とは異なる地域を指すことに注意しなければならない。
- 6 ツングース諸語における属格形の有無と被修飾語の人称所有接辞の省略に関しては、拙論 (Tamura 1991, 特に154頁の一覧表) を参照。
また、オロチオン語とソロン語において属格が一般に用いられることは、胡 (2001, 巻末に民話テキストあり) や朝克他 (1991) によって確認できる。
- 7 人称所有接辞は 3Sg (三人称単数) などの略号で表す。他の略号については本文の後の「略号」の欄を参照。
- 8 この接辞は「俺はお前より強い」のような比較の対象を表す用法でしか使われないが、Sunik (1958: 79) によればエウエンキー語の奪格接辞 -duk などと同源である。
- 9 他の言語も含めた格接辞の一覧表と祖形については池上 (1989: 1078) を参照。
- 10 該当箇所では šaseu となっているが、šapšeu のミスプリである。
- 11 Sunik (1958: 81) に場所副詞の例として edjgeji「ここから」が挙げられている。
- 12 場所副詞ではない一般の語に -ji が付いた例としては「倉庫から」(風間 1993: 57), 「戸口の所から」(風間 1993: 236) などがある。
- 13 *-gii はエウエンキー語, エウエン語, ソロン語ではもはや

生産的な接辞ではなく、エウエンキー語 ugii「上の面」のような語の中に融合している。これに対し、ナーナイ語, オルチャ語, ウイルタ語, ウデヘ語, オロチ語, すなわち第II・III群のツングース諸語においては、この接辞は -ji, -jia, -ja, -je などの形で生産的に用いられている。Tamura (1996: 146-7) を参照。

- 14 前述のようにクル・ウルミ方言では方向格接辞は起点を表さない。この *taa-tki*「そこから/それ以来」は例外となる。

参考文献

- 安俊 (1986) 『赫哲語簡誌』北京, 民族出版社。
池上二良 (1989) 「ツングース諸語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第2巻』1058-83頁, 東京, 三省堂。[この項目の記述の一部は、池上 (2001) 所収「ツングース語の変遷」の中にも組み込まれている]
池上二良 (2001) 『ツングース語研究』東京, 汲古書院。
風間伸次郎 (採録・訳注) (1993) 『ナーナイ語テキスト』小樽, 小樽商科大学言語センター。
風間伸次郎 (1996) 「ヘジェン語の系統的的位置について」『言語研究』109, 117-139頁, 日本言語学会。
胡增益 (2001) 『鄂倫春語研究』北京, 民族出版社。
朝克 (1997) 『滿一通古斯諸語比較研究』北京, 民族出版社。
朝克/津曲敏郎/風間伸次郎編 (1991) 『ソロン語基本例文集』札幌, 北海道大学文学部。
津曲敏郎 (1993) 「ヘジェン語の形態的特徴と満州語の影響」岡田宏明編『環極北文化の比較研究』札幌, 北海道大学文学部。
尤志賢編「安徒莫日根」(1)~(4)『満語研究』1 (1985), 2 (1986), 3 (1986), 4 (1987)。哈爾濱, 黒龍江省満語研究所。
尤志賢編「香叟莫日根」(1)~(11)『満語研究』5 (1987)~15 (1992)。哈爾濱, 黒龍江省満語研究所。
Avrorin, V.A. (1959) *Grammatika nanajskogo jazyka, tom 1.* Moskva/Leningrad, Akademia nauk SSSR。
Avrorin, V.A./Lebedeva, E.P. (1968) *Oročskie teksty i slovar'.* Leningrad, Akademia nauk SSSR。
Doerfer, Gerhard (1975) 'Ist Kur-Urmisch ein nanaischer Dialekt?' *Ural-Altische Jahrbücher*, 47, S.51-63. Wiesbaden, Otto Harrassowitz。
Doerfer, Gerhard/Weiers, Michael (Hrsg.) (1978) *Beiträge zur Nordasiatischen Kulturgeschichte.* Wiesbaden, Otto Harrassowitz。
Ikegami, Jiro (1974) 'Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen' *Sprache, Geschichte und Kultur der altaischen Völker. Protokollband der XII. Tagung der Permanent International Altaistic Conference 1969 in Berlin.* S.271-2. Berlin, Akademie-Verlag。[池上 (2001) に再録]
Onenko, S.N. (1986) *Russko-Nanajskij slovar'.* Moskva, Russkij jazyk。
Sem, L.I. (1976) *Očerki dialektov Nanajskogo jazyka. Bikin-skij (Ussurijskij) dialekt.* Leningrad, Akademia nauk SSSR。
Sunik, O.P. (1958) *Kur-Urmijskij dialekt.* Leningrad, Akademia nauk SSSR。
Sunik, O.P. (1982) *Suščestvitel'noe v tunguso-man'čurskix jazykax.* Leningrad, Akademia nauk SSSR。
Sunik, O.P. (1985) *Ul'čskij jazyk.* Leningrad, Akademia nauk SSSR。

Tamura, Kenichi (1991) 'Die Genitivstruktur der tungusischen Sprachen' 『ドイツ文学研究』 23, 141-160頁. 名古屋, 日本独文学会東海支部.

Tamura, Kenichi (1996) 'Die elativischen Funktion des tungusischen Instrumentals—Unter besonderer Berücksichtigung des Nanai—' 『名城商学』 45別冊, 137-151頁. 名古屋, 名城大学商学会.

Zhang, Yanchang/ Zhang, Xi/ Dai, Shuyan (1989) *The Hezhen Language*. Changchun (長春), Jilin University Press.

(平成14年9月11日受理)